

高澤良一句集「ねずみのこまくら」評

独歩への一歩 茨木和生（「運河」主催）

高沢良一句集「ねずみのこまくら」の序文も跋文も、ずいぶんと丁寧に読み込んで書かれてあるので、入っていく余地などないくらいであるが、著者と同世代に呼吸する者として、本集を一読し、これからを期待できる作家であることをはじめに言挙げして、筆を走らせていきたい。

大年のむらさきだちし夕櫂

裸木となりてさくらはそこらの木

もうそろそろ山が笑ふと胡桃の木

裸木となりて櫂の豊饒たり

数へ日の日にまどろめるさるすべり

根方よりずいと見上げぬ冬櫂

裸木となつてゐる冬の木を素材とした作品をまず抜き出してみたい。そしてもうここに、この作家が対象に迫つていくのに、さまざまな体のぶつつけを試していることを発見する。対象に迫るとは、自然の神秘に触れに行くことでもあるが、そのことに苦闘している姿を発見する。対象に入つていき、それを写し出すということだけでなく、詩としての深さにまで入ろうと試みいることを発見する。しかし、これらの姿や試みが発展途上にあることも事実である。蛇が脱皮して身を大きくすることく、作家として大きくなるために乗り超え、打消していかなければならぬものも見えておく必要がある。

裸木となりてさくらはそこらの木

裸木となりて櫂の鬘鏤たり

根方よりずいと見上げぬ冬櫂

打消していかねばならないといえ、裸木と

なりて という措辞を一つの作品に絞ること
あり、乗り超えていかねばならないといえ
豊鑠たり という把握であろう。 裸木とな
て、大きく枝を張り拡げている樗は、たしかに
他を圧して豊鑠としている。 豊鑠たり とい
うのも、この作家の発見には違いないが、こ
でどどまっついては、まずぐに攻め入つての突
破口を開くことはできないだろう。 根方より
の作品の冬樗であるが、ここには 豊鑠 と
いうことはを超えた存在感がある。 裸木とな
りてさくらはそこの木 という作品に、この
作家独自の視座のあることを見ている。 眼前に
しているのは、裸木となつて、そこらにある
木々と変わらぬ姿をしている桜の木であるが、
花咲かせて、そこの木とは異つた存在であつ
たさくらへも心は通っている。 さくらに、そ
らの木と同じになつているさくらの裸木が、や
がてそこらの木とちがつた存在として立ちあ
がってくることも思ひは通っている。

この作品で作者は、さくらそのものの奥処に入
るうとして、いままでに誰もを試みなかった視

座を誕生させているといってよい。

大年のむらさきだちし夕櫂

もうそろそろ山が笑ふと胡桃の木

数へ日の日にまどろめるさるすべり

数へ日 と 大年 には、わずかな日の差があるが、そのわずかな間の季の感をこまやかにしとげている佳品である。この夕櫂も大きなものであるうが、夜明ければ新しい年という、この夕暮の光の中に、むらさきだつている櫂の繊細な枝々のひとつひとつにまでも生命の通っていることを見届けているこの作家の眼差しの深さが見えてくる。数へ日の、意外と暖かな日ざしにまどろんでいると見たさるすべりに、この木に注いだこの作家の限差しの暖かさが見え、数へ日のなかの人間のさまを思い浮かばせてくれる。もうそろそろ山が笑ふ と感じてゐるのは勿論作者であるが、それを 胡桃の木 を通して見ているこの作用の感受の豊かさを眩しむ。胡桃の木の本質に立ち入っている

から掴むことができたのだとも思う。この胡桃の木、温みはじめた水音のひびきを聴いて、流れに枝を差し出していたにちがいない。裸木となりてさくらはそこらの木 という作品に、この作家独自の視座を見たが、この もうそろそろ山が笑ふと胡桃の木 という作品にも同じ新鮮さを覚え、この作家の作品を独歩のものとするための有力な武器となる視座である
と思つてゐる。花咲く木々の、共鳴する作品に眼を送つてみたい。

紅梅にもつと近く女こゑ

温言のごとき日を載せ茶の咲けり

散りそめて白さるすべり水の上

寒牡丹こゑあたたかく讚へらる

月高みはくれむ浮力のつくごとし

飛びつ切り上等の旭が花木瓜に

鳥入れてさくらのうつらうつらかな

連翹の八八八八と又八八八八と

一点に集中させていった鮮やかな写生の力を
感じる 散りそめて の作品と、喻をもって絞
り込んでいった 温言の 月高み の作品
に、この作家の力量の確かさを感じている。

はくれむ の花といえ、翔び立つという喻を
よく見てきたが、月が高く澄みのぼった空
へ、浮力のつい たよりに浮き立っている鮮
やかな景としてきりとることなど、作句技術
を、ことばを先立ててつくっているところはい
くまい。見詰めることをし、純な心で捉えるこ
とを先立ててこそその所産である。 飛びつ切り
の句も、素な心の捉えた朝日のまぶしさであ
り、新鮮なこの作家のことばである。 紅梅に
寒牡丹 鳥入れて のふくらみのある把
握と措辞は、生きること善をつくしていこう
としているものの、自然の讃歌であり、それを
尊ぶ人間の讃歌であるといつてよい。そして、
手放しの善意で、連翹の花のありさまを見て、
八八八八と見てとるのなど、軽い見立てと限つ
て思いたくない。 見立てといえ、集中に
あめんぼう方程式の×なす という作品があっ

た。『沖』副主宰の林翔の旧作に 鮎跳ねて瞬の
Cの字上り築 という作品のあつたことを思い
出す。見立てについて、一定との批判を安けて
きた私は、見立て といわれながらもそれに
取り組んでいく意欲を買いいたいと思つたりもし
ている。方程式の x なす は、見立てだが、や
はり、方程式の とまで突つ込んでいったと
ころに、一匹のあめんぼうでなくなにやらもぞ
もぞと動いて、不可解なまでの数量を見、ここ
まで突つ込んでいくやり方なら一つの方法とし
て、積極的になつて出る必要のあるものと思つ
たりする。さて、連翹の句について、軽い見立
てと思いたくない、といったのは、たしかに連
翹の花を見れば、八八八八という形で花咲いて
いるが、見立ててやろうという意識が先行すれ
ば、それは見えてこないものだからである。作
品の結果を見て、見立てといいきることはやさ
しいが、この八八八八という咲きざまを見てい
ることのできるのは、人間の明るさと自在さ
とがなければできないものである。八八八八と
見た連想力の駆使は高いものということはでき

ないが、これを恐れない作家であるから、前進の方向が見えてくるのだとも思ったりする。

もてなしに大きな湯婆年の宿

宿の餉にけとばしの出で紅葉季

亀の手といふ貝が出て涼しき餉

海鞘好きの客と覚えてゐて呉れし

この作品が一等上質のものというのではないが、こんな作品をなしうる作家を信頼したいのである。国際観光旅館などに泊っていては味わえない、お互いの人間を明らかにした交流が見え、そんな人間好きの作家像の結ばれてくる作品である。人間の厚味がなかつたら、作品の発展はないと思ったりするが、こうした作品を見ると、常民の親しさ、あたたかさ、善意をもっている作家であり、そこからさらにふくらみのある作品をつみ出しているのだと思えてくる。

ちやつきらくよくそろひめておちよば口

歳時記にないものへの挑戦について序文にも書かれていたが、ちやつきらこは三浦市に残っている小正月の神事舞である。いま、作家中上健次がすすめている熊野大学講座は十九回目となったが、そこでは俳句も一つの軸となっており、私は、「熊野の歳時記」を押し出せとも話してきたが、これもこの作家はすでに押し進めているのである。

序に跋に書かれなかったことを主に書いてきたが、そこに書かれていたことにことごとく賛意を覚えたからである。しかし、そこで称えられた作品と重なるものが多いが、絞りに絞った佳品を、私としてどうしても示しておきたいのである。

朴落葉山の暦日重ねけり

空ら拭きの机にひびくしぐれかな

竹が散るまた散る諭されぬることし

うすらひをつつつと鶺鴒浄瑠璃寺

ぶんぶんと泣虫抛り出さんかな

孟宗の雄ごゑおんべの火中より

菜飯食ぶ子にまづまづの志望校
鳥籠を日向にサトウハチロー忌
遊ばれて磯に置きざりあめふらし
われ泳ぐ下にテールブルサンゴ礁
巨福山梅の活発発地かな
暖雨去りうぐひす餅のやうな島
繰上げて海晴るる日の七五三

こうした佳品を見ると、生得、俳句の広さを
知悉していたように思えるこの作家が、もっと
ものを見、その攻めを拡大していけば、独歩の
道をたどつていくにちがいないとも思つてく
る。句集『ねずみのこまくら』を、その独歩へ
の第一歩として眩しんでおきたい。

